
好き

陸たまき

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好き

【Nコード】

N2445J

【作者名】

陸たまき

【あらすじ】

「好き」だけじゃやっていけない。でも「好き」がなきゃやっていけない。芸大を舞台にした、将来に迷う女の子の恋。

好き 前編

「ふられちゃった」

「雨に？」

別れた彼氏が私の所へやって来た。

「うん」

彼は女と別れると必ず、私の所へやって来る。

放課後の第3音楽室。

音楽室と言っても1クラス全員が入れるような広い教室ではなく、生徒が個人練習をするための小さな部屋だ。

その部屋の中央でチェロを構えたまま、私はいつも通りのセリフを口にした。

「残念ながらヤケ酒はないのですが」

「知ってる」

そして彼…高橋英介も、いつも通りの答えを返してきた。

英介は隅に置かれたドラムセットに腰を下ろすと、「はぁ」と大きなため息をついた。

幸せがひとつ逃げていく…いや、もう逃げて行ったのか。

私はぼんやり考えながら楽譜に視線を移し、弓を構えた。チェロの音が響きだす。

私は、音楽が好きだ。

とりわけチェロの音は最高。
低くて、体を包み込んでくれるような、安心する音。
目を閉じればまるで、温かいお湯の中にいるみたいな。

「奈緒子」

「んー」

手を止めずに私は答えた。

こういう時、英介が言う事は決まっている。

「2人でどっか行かないか。ぱあっと」

「いや」

もちろん私の答えもお決まりだ。

そのまま英介は黙り込む。

……はずなのに、その日はいつもと違った。

「なあ奈緒子」

「んー」

驚きつつも、私は手を止めなかった。どうせ大した事じゃない。

「俺たちやり直せないかな」

音がひとつ飛び、リズムが狂う。

「きつとうまくいく」

きつとうまくいく……そんな事が世の中にあるのだろうか？

「この前美由紀に言われたの。佐藤って絶対あんたに気がある。話しかけてみなさいよ、きつとうまくいくからって。でも佐藤には彼女がいた」

「茶化さな……」

「茶化してなんかない！」

ギ、と耳に不快な不協和音。

とうとう私は演奏するのを諦めて、英介に顔を向けた。

「あのね、今演奏中だから。話しかけないでくれない？」

英介は、軽く肩をすくめて見せた。

私は正面の窓から外を見る。

空はもう日が落ちて暗く、星が輝き始めていた。

夜空を見ると、私はいつも気持ちが悪く落ち着く。心が浄化されるような気がするのだ。

大きく深呼吸をすると、ゆっくりと弓を弦に乗せて、最初の音を弾いた。

流れ出す音楽。

『Someone's waiting for you』
誰かが君を待っている

別になぐさめている訳じゃない。

英介は歌詞なんて知らないだろうし、そもそも曲名を知らないだろう。

知ったらきつと怒り出すに違いない。

私は英介に笑って欲しかった。

失恋から立ち直るだけじゃない、前みたいな英介に戻って欲しかった。

絵が好きだと言った英介に。

夢を追いかけてた英介に。

きつとそこまでの気持ちは、英介には伝わっていない。
でもきつとそれでいいのだ。

音楽は時に、日常の嫌な事を忘れさせてくれる。
人を楽ししい、優しい世界に連れて行ってくれる。
本当の心を映し出す。

もちろんそんな深い感動をいつも与えてくれる訳じゃない。
でも足を止めて、一瞬でも耳を傾けてくれるなら。

パチパチ…

英介が手を叩く。

「それ、何ていう曲？」

そう、それで十分。

私の通う大学は芸術系の総合大学で、私は音楽、英介は美術科の学生をやっている。

私と英介は地元の同じ高校出身なのだが、英介は、入学当初…いや、高校時代から目立っていた。

中学の時、絵画コンクールでグランプリを受賞し、その後いくつかの賞で入賞を果たし、その才能を確固たるものにした。

しかし、英介は絵を描けなくなった。

授業では落第しない程度には描いている。でも、それ以上は描けなくなった。

私は悲しかった。英介にだけは夢を諦めて欲しくなかったから。

絵を描いていた英介が、どんなに生き生きしていたか知っていたから。

彼にはどこまでも上を目指して欲しかった。

私なんかじゃ見ることにさえ出来ない、もっとずっと高い所へ。

「つくしよん」

隣に立つ英介のくしゃみに、私の思考は遮られた。

場所は駅のホーム。私達は電車を待っていた。

中学が隣だった英介とは、乗る電車も同じ路線である。

「風邪？」

「そうかも」

そのまま私達は黙り込む。

でもそれは決して、居心地が悪いものではない。

むしろ付き合っていた頃より、そのどんな時よりも、今のこの瞬間が1番居心地がよかった。

相手の考えをあれこれと想像する必要も無いし、嫌われないようにと努力する必要もない。

自分は自分。相手は相手。

なのにさっきの…

私は軽く頭を振った。

あの告白まがいのセリフも、ふられた時に英介が言うセリフ集に追加だ。私も、うまい返し方を考えておかないと。

次の日の放課後、私はいつものように第3音楽室でチェロを弾いていた。
曲目は『威風堂々』。今度所属している学生オーケストラでやる曲だ。

・ゴンゴンー

防音扉が叩かれる音に、私は手を止める。

「失礼します」

そう言つて1人の男が入ってくる。

「初めまして。俺、染谷と言います」

にこにこ笑いながらいきなり名乗られて、私は困惑する。

「はあ……」

なんだろう、この人。

「突然なんです、モデルになって下さい」

「……は」

「モデル。俺、洋画を専攻してるんだけど、今度課題で人物画を描くことになって」

「え、あの……でも」

1度だけ、過去にモデルをやった事があった。英介の絵のモデルだ。それがきっかけで、私達は付き合うようになったのだ。

「……すみません」

私が断ると、その人はぱん！と両手を合わせ……なんと頭を下げたのだ。

「え、ちょ。や、止めて下さい！」

「このとおりです！伊藤さん、俺のイメージにぴったりなんだ！絶対邪魔はしないって約束するし、時間もそっちに合わせるし！だから、お願いします……！」

「……でも」

「あ、ヌードとか、そんな怪しい事はしないんで……！」

「当たり前です!!」

「お願い!困ってるんです!!」

「…あの、でも…」

「そこをなんとか!お願いします!!」

「…はあ」

こうして半ば押し切られるように、私は染谷健一のモデルを勤める事になった。

毎週大体週3回、放課後にモデルをする事になった。

音楽室だといろいろ不便なので、美術棟の彫金の部屋で、私は譜面台を立てていつも通りの練習をする。

染谷さん(先輩だった)はそれを少し離れた所で見ながら、せつせと絵を描いている。

2人きりで緊張していたのは初日だけで、弾いてしまえば全然気にならなかった。

先輩も描いている時は他の事に目がいけないタイプで、私の音なんて聴こえてないみたいだ。

緊張しなかったのは多分、先輩のけろつとした性格のおかげでもあったけど。

先輩は不思議な人だった。

「先輩、今度奨学生で留学するってほんとですか?」

「まあね。俺ってすごいから」

その上、とんでもない自信家だ。

「伊藤も将来自慢になるよ!。あの天才画家のモデルをやった事があるって」

「…不安にならないんですか。いつか…描けなくなるかもって」
「そう思ったら終わりだね」

終わり…

ぐさつときた。

「でもそこからまた、描けるようにだってなりますよね」

「さあ」

「さあって…」

「認められなかったら金にならない。金にならなかったら、芸術家としてやってくのは難しいよね」

先輩の言葉は辛らつだ。けれど、真実だった。

「…弾けないの？」

先輩が、ぽつりと言った。

私は驚いて顔を向ける。

「え？」

「ま、俺に聞かれたってどうしたらいいかなんてわかんないけど」

「ちが、私じゃ…」

「人の心配してんの？」

手を止めて、心底驚いたように先輩が聞き返す。

何故だか責められているようで、私は視線を下げた。

「まあ、心配するのは勝手だけどさ、結局やるやらないは自分1人の問題じゃん」

「…」

「誰に何を言われても、描けない時は描けない。…と思う、俺はね。」

まあ、なったことないからわかんないけどー」

「…自信家ですね、先輩って」

私は楽譜に視線を移した。

『威風堂々』。まるで先輩のために書かれた曲みたいだ。

焦る事も不安になる事もなくて、いつも自分のペースを保っている。才能があつて、自信があつて、自分を輝かす術を知っている。

人に妬まれる事があつても、この人はそんなの気にしないだろう。

私なんかとは、大違い。

「比べない方がいいよ」

明るい先輩の声に、手を止めていた私ははっと顔を上げた。

先輩はキャンバスを真剣な顔で見つめている。けれど口元には笑みが浮かんでいて、声の調子もいつもと同じだ。

「誰かと比べるのは止めた方がいい。特にこういう分野は。自分はこれが好きなんだって気持ちをも、持ち続けな」と

図星を指された悔しさから、私は思わず声を荒げた。

「比べてなんかないです。私はちゃんと、自分のやりたい事とか出来る事とかわかってるし」

「へえ。何？」

少し挑戦的な先輩の声。

「オーケストラで弾きたいんです。テーマパークとがミュージカルのバックで」

話ながら、私は心が落ち着いてくるのを感じていた。

そう、私は自分の夢に誇りを持っていたはずだった。これが私の夢なのだ。身の丈に合った夢。

ただ…先輩を見ると、その私の夢がちっぽけなものに思えてくるだけなのだ。

「へーかつこいい。すごい」

やはり先輩はキャンバスから目を離さない。

私は何だか突然、深刻な考え方をしている自分が馬鹿らしくなった。

「子供の頃、遊園地に行ってショーを見たんですけど、ほらあの、バックで楽器演奏してる人いるじゃないですか」

「？うん。あ、しゃべってもいいけど動かないでね」

「そのショーで、舞台の上の端で、ずっと太鼓叩いてるお兄さんがいて。その人がずっと笑顔なんですよ！見てるこっちが笑っちゃうような」

「ふーん。それで、シヨ一のバック？」

「そうなんです！」

「それってそのお兄さんが格好良かったからだったりして…」

「それもあります」

「あるんかい」

言い切った私に先輩がつっこむ。

子供の頃の夢。今の私の夢。

子供の頃のあのわくわくするような気持ちが蘇ってきて、私はにっこりと笑った。

好き 後編

「あ、奈緒子。昨日英介君があんたの事探してたけど、会った？」
チエロを持って廊下を歩いていると、美由紀が会うなりそう言った。
「会ってないけど…」

昨日は木曜日。私は先輩の絵のモデルをする為に美術棟にいた。

「なんだ。染谷先輩のモデルをやるって言ったら固まってたから、
あたしはてつきり…」

と言つて、美由紀がこちらを何か言いたげに見つめてくる。

「だから、私と英介はもうそういうんじゃないんだって」

美由紀の次の言葉を遮るように、もう何度目かもわからない言葉を
口にする。

大学に入つて、英介に新しく彼女が出来たと聞いた時は、やっぱり
ショックだった。

でもそれは誰でも感じる当たり前の感情だ。

先輩のモデルの話を聞いた時、英介もきつとそうだったんだろう。
それ以上の感情はない。

私の様子に美由紀は明らかに不満な顔をしていたけど、それ以上は
何も言わなかった。

「奈緒子」

個人レッスンを終わると、部屋を出てすぐに英介がいた。

「ちよつと話あるんだけど」

あれから…英介が彼女に振られてから、まだ1週間しか経っていない。

こんな事は初めてだった。

振られても英介はぐちる事はしなかったし、私だってなぐさめたりはしてこなかった。

そもそも英介が寂しくなるのか、別れた後ふらっと私が練習している所へ来る以外、交流がない。

「いいけど」

一体どうしたと言うのだろうか。

「今日オーケストラの日だろ？帰りながら話す」

こんなことまだ覚えてるんだ…と、私は少し驚く。

私の方は英介の妹の名前なんて忘れちゃってるのに。だって自分の生活に全然関係無い。

もしかしたら、こういうマメな所が英介がもてる要因なのかも。

毎週金曜は、地元の小さなこどもオーケストラのお手伝いをしている。

チエロを抱えて、バス停まで歩く。

「あのさ」

バスの時間を確認していると、隣で英介がすうっと息を吸い込むのがわかった。

「俺たち、本当にやり直せないかな」

「……」

口を開きかけて、でも結局言葉が見つからない。

「奈緒子が好きなんだ」

「え、だ、あ…え、絵は？」

「絵？」

不意に英介の瞳が鋭くなる。

「だって今、そんなこと言ってる場合じゃ……」

うつむいた私には、英介がどんな顔してるかなんてわからなかった。ただ、答えた声は今までに聞いたことがないほど堅かった。

「……絵が描けない俺に、価値なんかないって？」

驚いて顔を上げる。

けれど英介はもう、道路の向こう側に走り出していた。

違う。

そう言いたかったのに、口も体も動かない。

どれくらいそうしていたのかわからない。

いつの間にかバスが来ていて、私はそれに乗り込んだ。

チェロを抱きしめるようにして後ろの席に座り、携帯を取り出す。

英介に、何か、言わなきゃと思った。

——絵が描けない俺に、価値なんてないって——

絵を描く英介が好きだった。それは本当だ。

誰もがこの世界で将来芸術家として成功できる訳じゃない。でも英介はきつと出来ると信じていた。

輝けない私の代わりに、英介には夢を叶えてほしかったんだ。

「絵を描かなくなつて英介は英介だよ。絵を描いて欲しいって言ったのは、絵を描いている英介が、1番生き生きしてたから」

そこまでメールを打って、私は手を止めた。

どんな英介の負担にしかならない言葉を吐いてしまいそうだったからだ。

妥協して、諦めて、夢を捨てていく人は大勢いる。

英介はそんな人間じゃないでしょう？

そう、勝手に思ってた。

絵を描きたいんでしょう？

そう言ってしまうそうになるけど、それは私が勝手に思い描いていた昔の英介にしか通じない言葉。

今の英介が何を考えて、何を思っているのか、私にはわからない。でも。

嫌われたくない、という想いが、私を突き動かした。

バスから降りると、私は携帯の通話ボタンを押した。しばらく待ってやっと英介が出る。

「英介……」

英介は黙っている。

「ごめん。…私、価値がないなんて言うつもりで言っただけじゃない」
心臓がばくばくしている。

うまく言わなきゃと思った。英介を救いたい。思い上がりだってわかってる。

「わかってるよ」

英介の声は穏やかだった。それで少し落ち着いて、私はチェロを支えたままベンチに座る。

「俺、絵を諦めた訳じゃない」

そっと目を開けると、これから向かう市の公民館が目に入る。周りを緑で囲まれていて、遊具では子供が遊んでいる。

空が高い。

「焦ってもしょうがないんだ。これは俺の…気持ちの問題だから。そのうち描けるようになる」

自分に言い聞かせているようだった。きっと英介も不安なんだろう。それでもそう言える事に、私はほっとする。

「よかった」

「うん。…ごめんな」

「えっ、なんで。謝る事じゃないし。話だけならいつでも聞くから、また音楽室に来てよ」

「…うん」

電話を切って、ほっとしたはずなのに心のどこかにぽっかり穴が開いたようだった。

英介にもう私はいらないんだ、と思った。

1度出来た溝はどうやっても直せなくて、どんな言葉を伝えても英介の心に響いてないのがわかった。

私の言葉はもう、英介には届かない。

染谷先輩の描いた私の絵も出来上がって、美術の課題の展示会が行われた。

と言っても学校のホールに無造作に展示されるだけで、私には理解出来ない絵も多い。

全学生に対して投票が行われて、1番投票数の多かった学生は、来年の文化祭のポスターを任される事になる。

そこに英介の絵もあった。

カメレオンみたいな妙な生き物の親子…はつきり言って気持ち悪い…が、うちの学校の中庭にいて、ちょうど音楽室がある辺りを見上げてる絵。

本当に、英介はもう大丈夫だ。

私がいなくても、英介はちゃんとやっていける。

英介を支えてるつもりで、私が英介に支えられていたのと違って、英介は自分の力で立てるのだ。

誰と付き合っても、別れてからどんなに月日経っても、私だけはいつまでも特別なんだと思ってた。思い上がり。

自分で夢を追うのがつらいから諦めて、英介を支えるって思う事で自分を誤魔化そうとしてた。

オーケストラのオーディションを受けようと思しないで、就職活動もしないで。

「全然ダメじゃん…私…」

「あれインパクトあるよなー、ほらあの、半漁人みたいなもの」

「半漁人…」

もちろん英介の絵の事である。

英介の絵が投票で1位になったという事を、私は先輩から聞いた。場所はいつもの第3音楽室。

練習している所へ、先輩がやって来たのだ。

「残念ですね。折角描いたのに審査対象にならなくて」

先輩は4年生でその上来年は留学が決まっていたから、審査対象から外されていたのだ。

おかげで、私の絵はホールに飾られなくて済んだ。

「あーいえいえ。元から狙ってなかったし。暇だから何かやりたかっただけ」

「はぁ…」

はつきり暇つぶしと言われてしまうのも、何か悲しいものがある。

「それにおもしろかったし」

「……」

「あ、それよりもモデルやってくれたお礼するよ、何がいい？」

「お礼…ですか」

私は長いスラーを弾いた。先輩は何も言わずに待っている。

「お礼として、いつこだけ質問に答えて下さい」

「何？」

どこかおもしろがるような口調。

私は真っ直ぐと、先輩を見つめた。

「好きな人を忘れるには、どうしたらいいんですか？」

先輩は、口元をにやりと上げた。

「新しい恋」

「…恋なんて、当分する気になんないんですけど」

「あはは。だよね、うん、俺もそう」

先輩は明るくはははと笑う。

言葉通りだとすれば先輩も失恋したみたいだけど、そんなの感じさせない笑い方だった。

落ち込んでる自分が馬鹿みたいに思えてくる。

「じゃあ真面目に答える」

急に先輩が笑いをひっこめた。

「その好きだった人に、ちゃんと失恋すること」

「………」

私は固まった。

告白したの？と先輩は聞いているのだ。

でもその瞳には、何か他の意味もあるようにじっと私を見つめている。

いつか、英介に言われた事を思い出した。

「好きでいてもらえるように、俺が退屈しないように、奈緒子も努力しなきゃ」

私達は英介の告白から付き合い始めた。

私はいつもメールや電話を待ってるだけで、行動を起こすのは決まってる英介だった。

でもなかなかメールの返事が来ない事があって、少し文句を言ったから英介が言ってきた言葉だ。

私はいつもいつも、英介が来るのを待っていた。本当は毎日だって来て欲しいくせに、自分から動いて傷つくのが怖かった。

何に対しても私はそうだ。

チエロもそう。

少し頑張ってみて、結果が出て安心出来ればもっと頑張れた。でもチエロで食べていくのは難しいと思ってからは、その為に努力するのを止めていた。

頑張っても結果が出なかったら嫌だから。

心を開いたのに、傷つけられたら怖いから。

でもそれで後悔しないの？

何もしなかったから英介が他の人のものになって、何もしなかった

からチエ口を諦めなきゃいけなくなつて。

もしあの時何かしてればって、後悔しないで済むの？

…後悔する。

その未来の方が傷つくよりも怖かった。

「…染谷先輩」

「じゃあ俺は退散しますか」

私がおか言うよりも先に、先輩はドアに向かった。

「俺はちゃんと頑張った。だから後悔はしない」

最後にかつと笑うと、先輩は向こうに消えた。

「…英介？」

「どうした？」

携帯の向こうから聞こえてきた英介の声が今までと違う気がする、
私はきゅっと唇を噛んだ。

でも、頑張らなきゃ。

私はまだ何もしてない。

「絵、見たよ。1位だってね、おめでとう」

「ありがと」

英介が笑う。それだけで満足しそうになる。でも。

「話があるの。これから会えない？」

チェロを片付けて外へ出ると、ちょうどこちらへ向かってくる英介が見えた。

私に気付いて、少し笑う。

「英介」

おなかの底に力を入れて、声が震えないように名前を読んだ。両手はぎゅっと握りしめて、英介を見る。

英介は目を見張って、少し離れた場所で立ち止まる。

声も震える。心臓も震える。怖い。でも、頑張れ私。

これを言えば変わる気がする。きっと自分を好きになれる。だから。

「好き。別れてからもずっと好きだった。私と付き合って」
ぎゅっと目をつぶって下を向いた。

言えた。

ほっとしたら、ぽろっと涙が出てきた。

「…奈緒子」

英介が名前を呼ぶ。

びっくりしたような声。

涙をぬぐって、目に力を入れて前を見る。

まだ終わりじゃない。

振られても、今度は努力する。英介に好きになってももらえるように頑張る。

英介の顔は夕日のせいか赤く染まって見えた。

「ほんとに？」

英介の言葉に、私は大きく頷く。

そうしたら。

英介が、花のように笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2445j/>

好き

2010年10月11日04時53分発行